

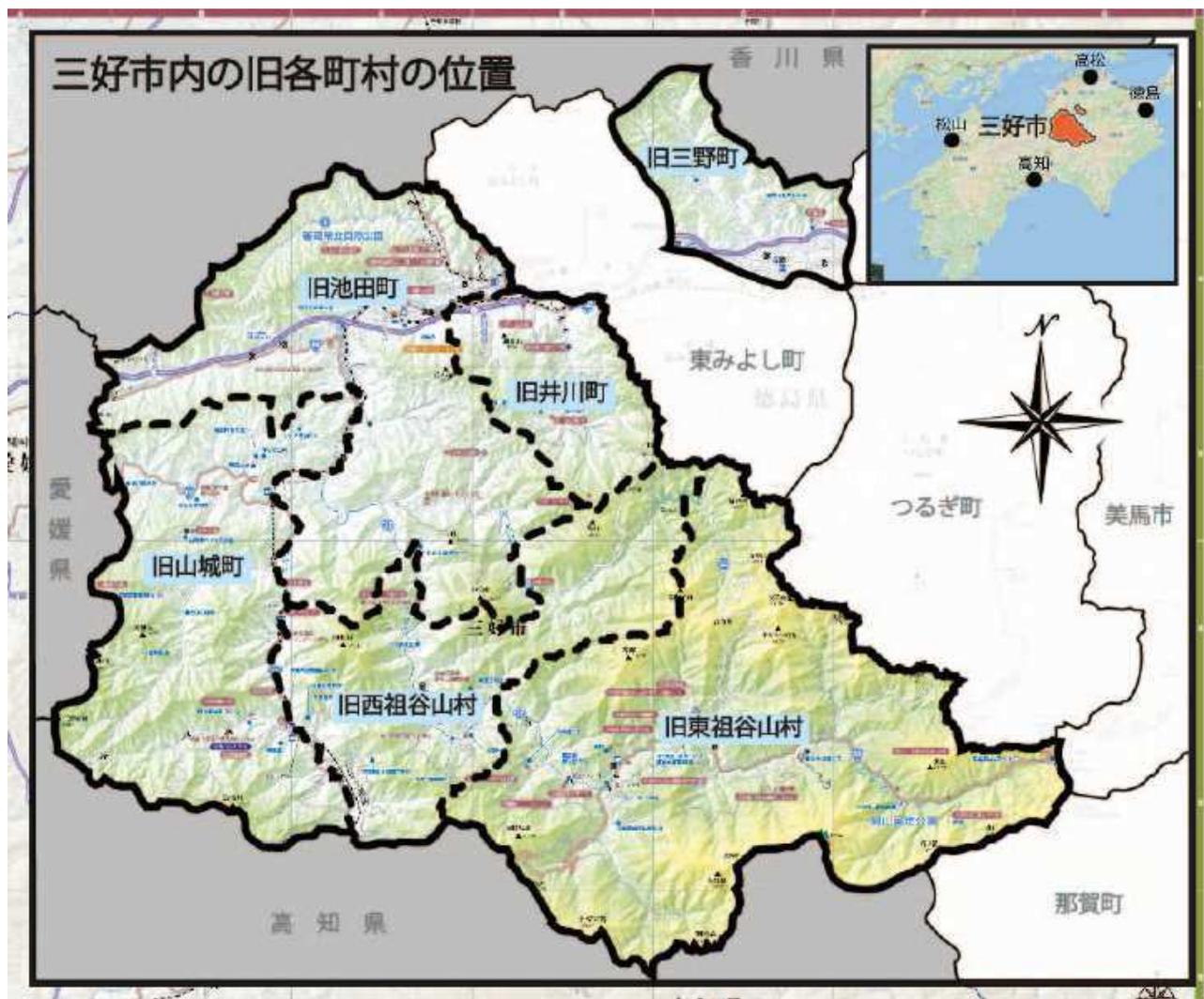
三好ジオパーク構想を取り巻く環境

1. 自然環境

① 位置

当地域は、徳島県の最西端に位置し、西は愛媛県、南は高知県、北は香川県に接し、四国のほぼ中央に位置しています。そのため、昔は他国との攻防の最前線の地であり、また四国中央部における交通の要衝としても栄えました。

当地域は東西に約39km、南北に約36kmに広がり、面積は721.48km²です。2006年3月1日に三野町、井川町、池田町、山城町、西祖谷山村、東祖谷山村の6町村が合併し、三好市が誕生しました。



② 地勢

当地域の南域は、1955mの剣山を筆頭に、1000mを超える山々が連なる四国山地が広がっており、東から剣山（1955m）、高ノ瀬（1740m）、三嶺（1893m）、天狗塚（1812m）と四国の背稜の尾根が西方へ連なり、高知県との県境となっています。この背稜部の北側には、烏帽子山（1669m）、寒峰（1604m）、中津山（1446m）、国見山（1409m）などの高峰がそびえています。これらの山岳の山上付近では、平坦地（小起伏面）がところどころ点在し、黒沢（池田町）や多美（井川町）などの特徴ある湿地・湿原が広がっています。四国山地は概ね急峻な斜面からなっていますが、斜面の途中の所々に比較的緩やかな斜面や平坦な場所が点在しています。このような急斜面途中の緩斜面は地すべりによってできたもので、その上に集落が形成されています（傾斜地集落）。

当地域の北域には讃岐山脈があり、大川山（1042m）を筆頭に、500～1000mの山々の尾根がほぼ東西方向に連なっています。讃岐山脈の南麓部分と讃岐山脈を貫く河川の西方傾斜面には地すべりによる緩斜面が多数あり、その上にも傾斜地集落が点在しています。

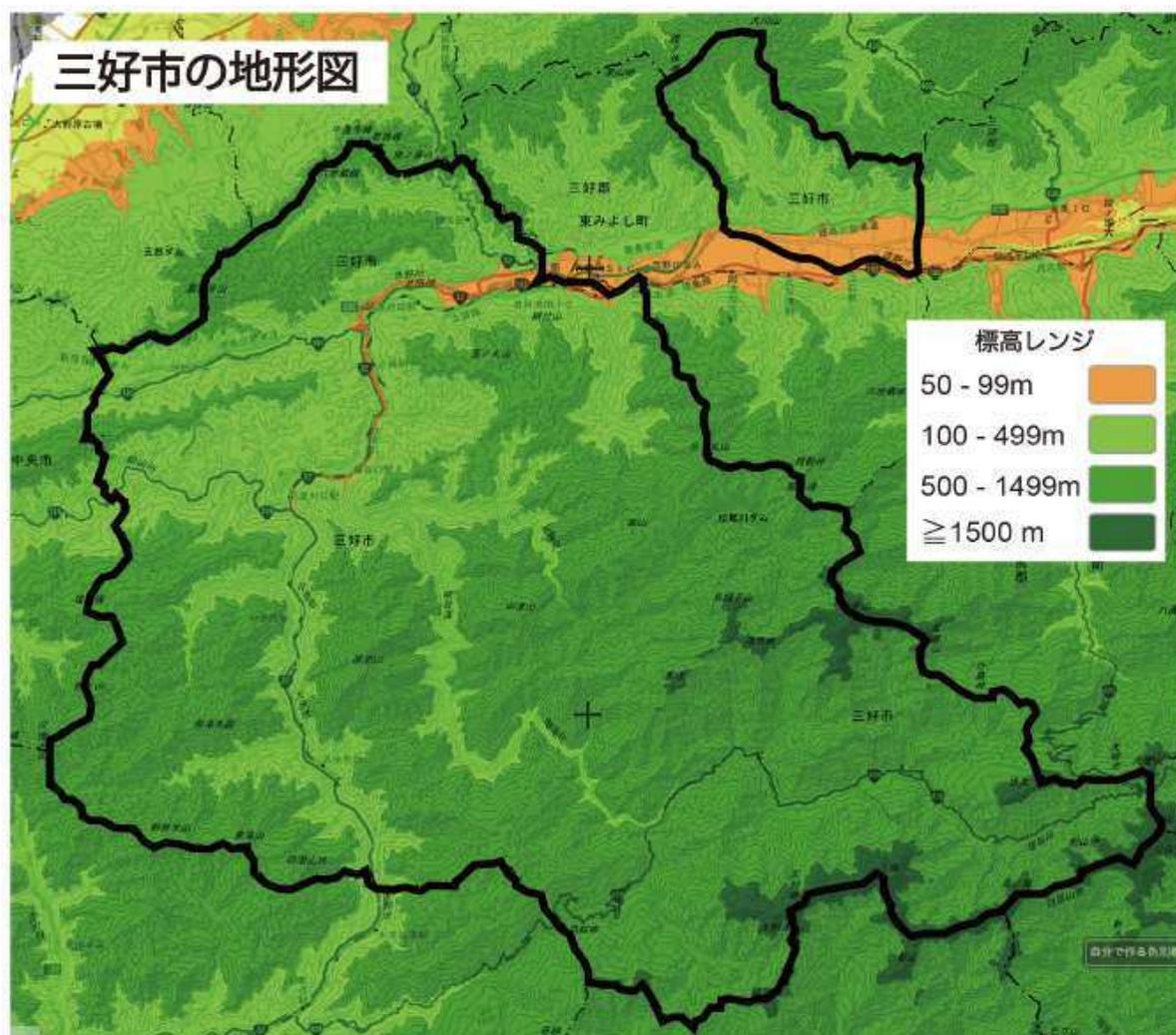
当地域のまん中には、吉野川が流れています。吉野川は、大歩危小歩危付近では急峻な四国山地を貫くように北流し、典型的なV字谷を作り出しています。またこの付近の吉野川には、数多くの瀬と淵が点在しています。吉野川は池田町付近まで北流すると、讃岐山脈によって流路が阻まれるため、大きく流れを東へ変えます。讃岐山脈と四国山地の間には、吉野川に沿って東西方向に平野が形成されています。吉野川の両岸には様々な高さの河成段丘が形成され、また吉野川北岸では扇状地が発達しています。

当地域はほとんどが林野であり、森林比率は89.6%と大きいのが特徴です。その中での天然林面積は3割ほどとなっています。当地域での人の居住エリアは、吉野川の沿いの平野や山間部緩斜面です。

特徴的な自然環境を有する当地域の中には、剣山を中心とする山岳があり、大歩危・小歩危および祖谷溪周辺とともに剣山国定公園に指定されています。また讃岐山脈側南麓域の三好市と東みよし町にわたるエリアは箬蔵県立自然公園として指定されています。

特有の地形と、その上で育まれた生態系が失われずに残されてきたこと、これが現在の当地域の風景の根源です。そして、その自然と密に共

存し生きぬいてきた傾斜地集落の人々、平野で自然の恩恵を商いに活用した人々などの努力が、この地の文化を生み出し、現在の当地域のツーリズムや産業などに大きく影響を与えています。



③ 河川

当地域には、四国を代表する一級河川、吉野川が高知県側から流れこみ、徳島平野へ向かって流下しています。またその吉野川には、四国山地や讃岐山脈側から多数の支流が注ぎ込んでいます。

◆ 吉野川

吉野川は、瓶ヶ森（愛媛・高知県境）を源流とする全長194km、流域面積3,750km²の一級河川で、四国では最も流域面積の広い河川です。当地域では、高知県大豊町から四国山地を貫くように北流する形で流れ込んでいます。吉野川の北流は当地域の池田町付近まで続き、そこから90度流路を東へ変え、徳島平野へ向かって流下します。

吉野川上流域の年間降雨量は2500～3000mmの多雨な地域で、降雨は夏季に集中してもたらされるため、突発的な増水が頻繁に発生するという特徴があります。そのため、吉野川中・下流域では、幾たびも洪水による被害がもたらされてきました。このことが、関東の利根川、九州の筑後川と並ぶ「日本三大暴れ川 四国三郎」として、吉野川を名高くさせる要因となりました。

その一方で、吉野川流域の北岸にあたる讃岐山脈南麓の平野は、長年水の確保に悩まされてきました。同様に、讃岐山脈北麓の香川県側でも年間降雨量が少なく、長年水の確保に悩まされてきました。

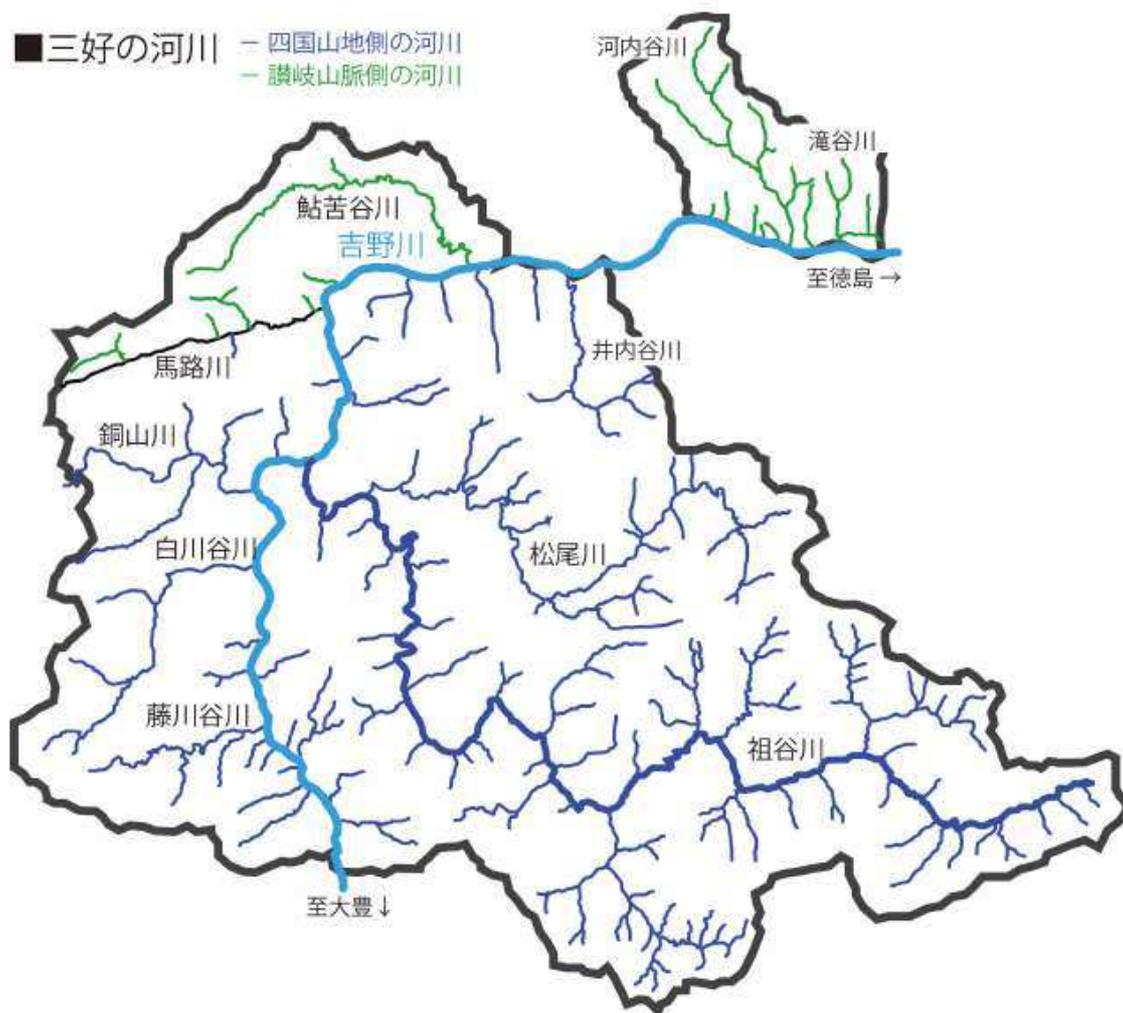
このような吉野川の治水・利水の改善を目的として、1966年には吉野川総合開発計画（基本計画）が定められ、1968年に当地域の池田町に池田ダム建設工事が着工、1975年に完成しました。ダム建設とともに香川用水、吉野川北岸用水の工事も着工し、1975年には香川用水が、1990年には吉野川北岸用水がそれぞれ完成しました。これらの用水は、水の確保に苦労してきた讃岐山脈麓に住む人々にとって大切な水源となっています。

このように、吉野川は徳島県や香川県の人々の生活と深くつながりのある河川です。

◆ 主な支流

剣山を水源として吉野川に流れ込んでいる祖谷川は、全長約54km、流域面積36.6km²の川です。祖谷川は西祖谷山村善徳あたりで流路を西から北へ変え、流下し、最終的に吉野川へ注ぎ込んでいます。祖谷川の東から西へ流下する流域には、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている「落合集落」、国の地すべり対策事業がなされている善徳・今久保地区などの傾斜地集落が数多く点在し、観光地としても名高い「祖谷のかずら橋」があります。南から北へ流下する流域では特に急峻な地形を呈しており、河川の蛇行が見事な「ひの字溪谷」が景勝地として知られています。祖谷川は水量の豊富で急峻な地形を有しているため、四国内で最も水力発電所が多く設置されており、6箇所あります。

銅山川は愛媛県の冠山を水源とし、全長約64kmで東方向へ流れ、最終的に三好市山城町で吉野川と合流します。この河川の上流部には別子銅山があり、銅鉱石をはじめとする鉱石が多く産出しました。このような特色のある銅山川では昔、砂金取りが行われていました。



讃岐山脈側から吉野川に流れ込んでいる三野町の河内谷川は、大川山を水源とする全長8kmの河川で最終的に吉野川と合流します。河内谷川の下流域では扇状地地形が形成され、伏流水となります。

他にも、藤川谷川、白川谷川、松尾川、馬路川、鮎苦谷川、井内谷川、滝谷川など、多くの支流があります。

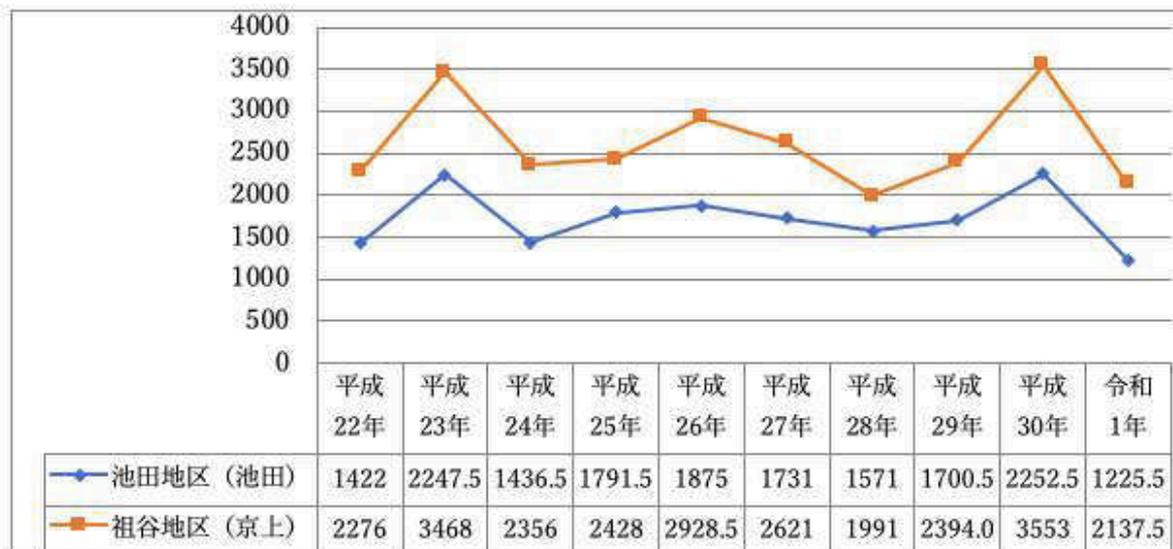
④ 気候

当地域は山間部や平野部の地形が影響し、気候に大きな違いがみられます。ここでは平野部に位置するアメダス池田観測所のデータと、山間部に位置する京上観測所のデータを基に気候について述べます。平成21年から平成30年までの平均年間降水量は、祖谷地区が約2600mmであるのに対し、池田地区は約1740mmと少なくなっています。これは四国山地に太平洋側から来た雨雲があたり、祖谷地区周辺で多くの雨を降らすためです。また、祖谷地区は日本海側と類似した気候であり、1月、2

月は積雪することもあります。祖谷地区の平均気温は約12℃で、池田地区の平均気温は約14℃です。

◆市内観測地点の年間降水量

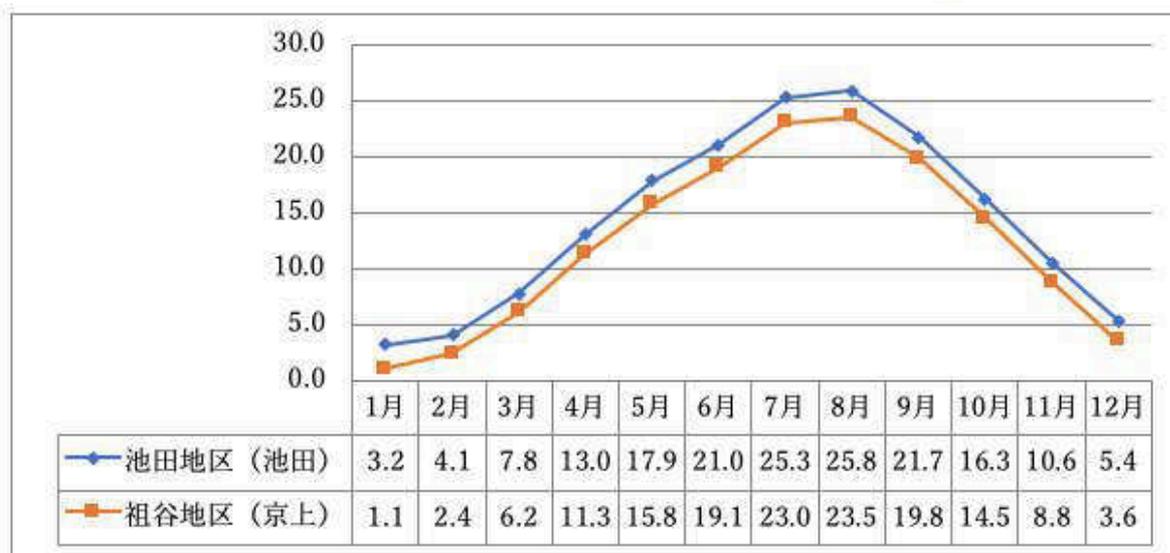
単位：mm



(資料：気象庁 徳島県平成 21 年 (2009 年) から平成 30 年 (2018 年))

◆市内観測地点の月別平均気温

単位：℃



(資料：気象庁 徳島県平成 21 年 (2009 年) から平成 30 年 (2018 年) までの平均値)

⑤ 自然災害

当地域では、地すべりなどの斜面災害、吉野川の増水に伴う洪水（浸水）、地震に伴う土地の振動など、地質・地形に密接に関連する自然災害を度々被ってきました。

◆斜面災害

当地域内の南域に広がる四国山地および北域に連なる讃岐山脈では、地すべりをはじめとする斜面災害が有史以前から現在に至るまで頻繁に発生しています。とりわけ四国山地は、全国でも有数の地すべり地帯として知られています。四国山地は、泥質片岩などの一方向に剥離しやすい結晶片岩類や地すべりを誘発しやすい粘土鉱物を生成する御荷鉾緑色岩などの地質、急峻な地形、年間降水量約2600mmの多雨な環境など、斜面災害を頻繁に起こしやすい条件となっています。そのため、山地隆起に伴って生じる亀裂（破碎）により、地すべりや土石流などの斜面崩壊が頻繁に引き起こされてきました。とりわけ地すべりに関しては大規模な災害が過去に何度も起こっています。近年では、1965年に東祖谷山村大西で深層崩壊※1「大西のザレ」が発生し、12万m³もの土砂が流出しました。また、1999年に西祖谷山村善徳地区のとびのす谷で土石流が発生し、ホテルの一部が崩壊、土産物屋が全壊したほか、県道が160mにわたり土砂で埋没しました。そして、2018年度に発生した平成30年7月豪雨では、山城町の白川谷川や藤川谷川を中心に多くの箇所でも表層崩壊※2が起きました。また、現在進行中の地すべり箇所も当地域内には多数あり、なかでも西祖谷山村の善徳・今久保地区、有瀬地区については国土交通省の直轄地すべり対策事業、そして東祖谷山村の檜尾地区、麦生土地区、西山地区については、林野庁の直轄地すべり防止事業が行われています。

讃岐山脈側では、四国山地と比較すると年間降水量が少ないですが（1500mm以下）、2004年台風21号に伴う降雨により、池田町野呂内地区では鮎苦谷川へ流れ込む多数の小河川で大規模な土石流が発生しています。

※1 深層崩壊

斜面崩壊のうち、すべり面が表層崩壊より深いところで発生するもの。表土層だけでなく、下部の地盤までもが崩壊土塊となる比較的規模の大きな崩壊現象。

※2 表層崩壊

斜面崩壊のうち、表層部が原形をとどめず崩落するもの。一般に急傾斜地に見られ、崩落する速度が速く、強風化岩などで多く発生する。また、豪雨等によって引き起こされることが多い。

「大西のザレ」から垣間見る、当地域の地形や自然災害と地名について

地名は大地のネームプレートである。当地域内では、この地域に特有の自然災害が起こった箇所（もしくは起こりやすい箇所）や特徴的な地形が数多くあり、それらの地は、古来、人々が特有の地名として名付け、遺してきた。

「大西のザレ」もその一つであり、「ザレ」とは、「崩れる」の意味で山腹の斜面崩壊の現象を指した言葉である。また、観光名所として名高い大歩危小歩危の「ボケ」も「崖」を意味する言葉である。

◆吉野川の増水に伴う洪水

当地域を流れる一級河川の吉野川は、かつては毎年のように氾濫し流域の人々を苦しめてきました。とりわけ、池田町付近から下流側では流域に平野が広がり、その上に多くの街並みが築かれたため、幾度となく氾濫の被害を受けてきました。

近年の洪水被害の例では、2004年台風23号が挙げられます。この洪水は、浸水面積172.5ha、床上浸水47戸、床下浸水83戸もの被害をもたらし、戦後最大の洪水災害被害となりました。

◆地震

当地域には、北域に中央構造線活断層系が東西方向に貫いており、池田断層、箸蔵断層、三野断層とそれらに付随する断層（例：芝生衝上断層）があります。これらの活断層の活動は、右横ずれ運動に讃岐山脈（断層北側）が隆起する特徴があります。池田断層は右横ずれの平均変位速度が7m/千年程度、三野断層は8～9m/千年程度と考えられており、北側の隆起変位量は数十cm/千年程度と見積もられています。古文書などによる中央構造線由来の直下型地震被害の記録は残されていませんが、三野町での三野断層トレンチ調査に伴う断層の最終活動時期は16～17世紀ごろと考えられています。

また、約100年に一度発生する南海トラフ地震による地震災害も当地域は経験してきました。古文書に残されている記録として、1854年12月24日に発生した安政南海地震により、西祖谷山村にある善徳地区や国見山山麓で地震による揺れが要因となる斜面崩壊が発生したという出来事が残されています。

このように当地域では、数年～数十年単位で発生する斜面崩壊や洪水などの自然災害、百年単位で起こる南海トラフ地震、そして千年単位で生じる可能性のある中央構造線活動による直下型地震などの様々な自然災害と遭遇し、人々はその脅威を乗り越えて暮らし続けてきました。このことは、中世以来の集落における多くの民家が傾斜面に工夫を加えて築かれ、代々暮らし続けてきたことから窺うことができます。このように、当地域で暮らし続けてきた先人たちは、この特有の地質地形や自然の脅威と共存しながら持続可能な地域を受け継いできたのです。

⑥ 生態系

当地域には、西日本第二の高峰である剣山（1955m）をはじめとする1000mを超える山々が四国山地側に存在しています。また、500～1000mの尾根を連ねる讃岐山脈が当地域の北域にあります。四国山地・讃岐山脈の山々が当地域の広範囲を占めているため、全面積のうち87%（64,665ha）は森林であり、その約6割は人工林、残りの4割は天然林が広がっています。人工林のほとんどは杉やヒノキなどの針葉樹、天然林のほとんどは広葉樹で構成されています。

◆当地域の植生について

当地域には、急峻な山岳からなるエリア、その間を縫うように流れる溪流、そして一部の山頂では平らな地形（小起伏面）があるなどの特徴的な地形があります。そのため、その地形や環境に応じて、草地植物、剣山山頂周辺の高山植物、溪流沿い植物、湿地植物などの特色ある植生が分布しています。

【草地植物】

剣山山頂付近の標高1700m以上の稜線部分では、ミヤマクマザサなどのササ草原やコメツツジなど落葉低木が広がっています。また、塩塚高原などの稜線部ではススキが広く分布しています。これら稜線部に広がるササやススキは、風あたりの強いところに生える風衝草原です。

【剣山山頂周辺の高山植物】

標高1000m以上は冷温帯域にあたり、亜高山帯の植物が分布しています。標高1000～1500m付近ではブナ林などの亜高山帯の樹木が分布

しており、1650～1780m付近ではシラビソの変種であるシコクシラベ群落シコクシラベが小規模ながら分布しています。

【溪流沿い植物】

急峻な勾配をなす四国山地の河川では、川幅の狭い溪谷が点在しています。このような溪谷では降雨により増水を頻繁に繰り返すため、その周辺に蔓延る植物は度々浸水し流されます。このような地に生える植物の中には、この流水に耐える特徴を持つものがあり、溪流沿い植物と呼ばれます。溪流沿い植物は増水する環境に対応するために、小型化・細葉化する特徴があります。当地域では主に、大歩危小歩危付近を流れる吉野川、その支流である祖谷川、松尾川、銅山川などで溪流沿い植物が観られ、代表的なものでは、キシツツジ、ホソバイブキシモツケ、ナガバシャジンなどがあります。

【湿地植物】

当地域の四国山地側の山頂付近では、所々に頂上付近が平坦な地形（小起伏面）があります。この地形上は、いくつか湿地が形成されており、黒沢（池田町）や多美（井川町）等の湿原があります。とりわけ黒沢湿原は、雨水と地下水で涵養されて植生が維持されている特徴のある湿原で、環境省の「日本の重要湿原500」にも選定されています。このような湿地帯に生息する植物として、ミズゴケ類群落、サワギキョウ（多美湿地のみ生育）などがあります。

◆当地域の動物について

当地域の動物については、当地域特有の自然環境に適応した生態系を所々で見ることができ、とりわけ河川や山間部でその様子を伺うことができます。

【河川】

当地域の河川では、鮎やアマゴなどが生育しています。吉野川では、豊富な水量とその水が運搬する土砂により鮎の餌となる藻が繁殖するため、良質な鮎の生育場所をもたらしています。また、池田ダムより上流の吉野川には多数の瀬が点在しており、この自然条件が体長の大きな鮎の生育を促しています。

【山間部】

野鳥については、風衝草原を生育環境とするセッカやホオアカなどの鳥類が塩塚高原で、ヒバリやタヒバリが腕山の草原などで確認されています。黒沢湿原などの湿地では、水辺に生息する野鳥であるアオサギやキセキレイが生育しています。

また生態系の中でも上位にあたるツキノワグマや猛禽類のクマタカなども当地域には生息しており、どちらも希少種として知られています。特にツキノワグマについては、現在四国では唯一、剣山系周辺のみに16～24頭数（2019年12月時点）生息していると推測されています。

国の特別天然記念物に指定されているニホンカモシカ等の珍しい動物も山間部では生息しております。しかしながら、当地域の山間部で増殖しているニホンジカの生育域拡大に伴い、ニホンカモシカの生育領域は変化し続けています。

2. 社会的環境

① 人口動態

当地域の人口動態については、1960年時点で71,370人に達していましたが、現在では25,194人（2020年4月末時点）となっています。とりわけ1960年から1975年までの当地域の人口減少は5年ごとに約1割ずつ減少するという急速な人口減少を示しており、その中でも東・西祖谷山村については、この15年間で約半数にまで減少しました。

また、「三好市人口ビジョン」（2015年に策定）によると、今後も人口は減少する見込みで、2025年には老年人口が生産年齢人口を上回ると推測されています。さらに、国立社会保障・人口問題研究所によると、2045年には11,931人まで人口が減少すると考えられており、今後、人口減少とともに超高齢化社会が到来するという推計が出ています。

三好市人口ビジョンの趨勢人口の年齢構造の推移データによると、2020年の現役世代（15～64歳）は46.4%、高齢世代（65歳以上）人口は45.3%であり、すでに一人の現役世代が一人の高齢世代を支える時代に突入していることが伺えます。

当地域内の集落の状況については、2015年5月末現在、市内にある442地区のうち、179地区（40.5%）は65歳以上が50%以上を占める限界集落で、197地区（44.6%）は55歳以上が50%以上を占める準限界集落です。これらの集落では後継者不足等の影響により集落やコミュニティの維持が難しい状況にあります。

また若い世代の人口流出も拍車をかけており、地元高等学校から進学や就職に伴いこの地域を離れる若い世代が増加しています。地元高校の資料によると、2017年度には154名（地元出身卒業生の89%）、2018年度には125名（93%）、2019年度には119名（93%）が三好市外へ転出をしています。

このように当地域の人口減少については、1960年以前からすでに始まっており、自然減だけでなく、地域から他地域への転出・移住も人口減少を加速させる大きな要因となっています。人口減少の問題は、点在

■市の人口動態

(単位：人・世帯)



資料：国勢調査

する集落の維持を逼迫し、これまで継承されてきた文化や守られてきた自然などを存続していく上で深刻な地域課題の一つとなっています。

その一方で、近年では三好市へ移住する人々が増えており、2017年度には186名、2018年度には199名、2019年度には165名となっています。2019年度のI・Jターン移住者（移住者の36%）の移住の動機は、三好の自然環境への魅力が41%となっています。このように、当地域の自然環境に魅力を感じ、移住する方が近年増えつつあります。

当地域には他地域と同様に深刻な人口減少の課題がありますが、大歩危小歩危、祖谷地区をはじめとした、他に類を見ない地質地形・生態系・歴史文化などの地域資源に恵まれています。それらの良さを感じ、都市部などの地域外から移住する方が少しずつ増えています。今後、加速する人口減少問題を当地域なりの手法で切り込んでいくためには、昔から培われ継承されてきた傾斜地集落での暮らし、吉野川を活用した文化など、「この地にしかない自然とそれらと共存してきた人々」の素晴らしさについて、まず地域住民が目を向け、理解し、誇りを持つことが持続可能な地域社会を構築するために必要不可欠です。その構築のための手法の一つとしてジオパークがあります。これは、特徴ある地質地形をベースとし、地域資源の保全・活用を行い、持続可能な地域を築きあげるためのプログラムです。当地域でジオパークを活用することによって、地域住民や当地域のファンが再度この地の良さに気づき地域愛の醸

成を促すことができます。さらに、ジオパーク活動を通して、地域内外の多種多様な人々とのつながりを持つことにより、三好らしい、持続可能な地域社会の構築を考え、取り組むことが可能となります。

②文化（地域資源）

当地域は、徳島の最西端に位置する地理的条件、また山間部緩斜面に築かれた集落や交通の要所・葉たばこの集積及び加工によって栄えた平野の商業地域など、特徴的な自然環境の上で育まれた多様な歴史文化があります。

◆三好の文化財

当地域の特徴ある歴史文化的な地域資源の多くは文化財として指定・登録されており、2020年5月1日時点での総件数は178件（うち、指定・選定が122件、登録が56件）にも上ります。指定文化財のうち、国指定の文化財が16件、県指定の文化財が32件ありますが、その中でも国指定「大歩危小歩危（名勝・天然記念物）」、県指定「太刀野の中央構造線（天然記念物）」、「祖谷、三名の含礫片岩（天然記念物）」、「黒沢の湿原植物群落（天然記念物）」などの自然、「東祖谷山村落合（重要伝統的建造物群保存地区）」、「祖谷の蔓橋（重要有形民俗文化財）」などの特徴ある自然環境の上で築かれた歴史文化の表象ともいべきものがあります。

これらの文化財に指定・登録されている地域資源は、大地が育んだ自然環境そのものや、その自然と共存してきた人々が育んだ歴史文化の表象だと言えます。地域資源の保存を軸として指定・登録されてきたこれらの文化財は、今後持続可能な形で活用されることにより、その価値をさらに高めることが可能となります。

◆文化財以外の地域資源

文化財として指定・登録されていない地域資源も数多くあり、それらも地理的条件や特徴的な自然環境の上で築かれてきました。

山間部の傾斜地で特筆するべき一つとして、特有の傾斜地農業があります。地すべり地形を活用して形成された傾斜地集落では、傾斜地地形をそのまま活用した農業方法、特徴的な農作物の栽培などが継承されてきました。三好市をはじめとするこの地域周辺の傾斜地畑は、主に結晶片岩という岩石が大地を構成しているため、水はけの良いことが特徴で

す。そのため、ソバなどの雑穀、じゃがいも、こんにゃく芋、お茶などの作物が栽培されており、郷土料理や名産品として知られています。

一方、池田町マチ・サラダや井川町辻などの平野部は、昭和前半ごろまで刻みたばこ産業で栄えた地域でした。この背景には、これらの地域が交通の要衝であったことと関係しています。山間部の水はけの良い地で育てられた葉たばこは、四国山地の尾根沿いを経て平野部に集積し、加工されたのです。刻みたばこで栄えた池田町マチ・サラダや井川町辻には、その当時に立てられた家屋や集積所跡などが残されています。刻みたばこを営んでいた事業者は現在、酒造業や醸造業などへ転業し、三好市の名産品を製造しています。

また大歩危小歩危付近の吉野川及び祖谷川沿いでは、非火山性の温泉・鉱泉が点在しています。1963年に祖谷温泉が開発されて以降、周辺に温泉・鉱泉が次々と開発され、現在、四国山地内でも有名な温泉郷として知られています。

吉野川に関係する地域資源として、昭和中頃まで続いた吉野川の水運文化（渡し場、川港跡）やラフティングやウェイクボードなどのウォータースポーツなどがあります。

このように、当地域には山間部や平野で多様な地域資源が点在しており、その多くは急峻な地形や河川流路などの大地の変動と密接に関係して築かれたものです。今後これらの地域資源を継承していくためには、地域住民や当地域に関わる多くの人々がその付加価値を理解した上で正しく保全し、持続可能な形で活用し続けることが必須です。

③ 産業

◆産業構造

当地域の主な産業として、第一次産業では農林業、第二次産業では建設業と製造業、第三次産業では卸売業、医療・福祉関係、宿泊業、飲食サービス業、複合サービス事業などがあります。産業国勢調査の結果によると、三好の産業分類別就業人口は減少傾向にあり、2015年には11,589人です。人口減少の要因として、少子高齢化が進んでいることが原因として考えられており、2005年と比較すると2,681人（18.8%）減少しています。

大分類別でみると、第1次産業と第2次産業における減少が著しい状況です。第1次産業は362人（31.2%）、第2次産業は1,321人（31.2%）の大幅な減少傾向を示しています。

【第一次産業】

当地域の民有林率は85%を超えており、第一次産業の林業については、山城町や三野町を中心に盛んです。もともと当地域は、広葉樹薪炭生産やたばこ栽培を中心とした産業が盛んでしたが時代を追うごとに衰退し、現在では、第二次世界大戦後の拡大造林期に植林されたスギ・ヒノキを活用した林業が山間部での産業の一つとなっています。一方で農業は、傾斜地の水はけの良い土壌を活用した農作物であるソバ・ゼンマイ・果樹・茶など、平野では米・果樹などが栽培されています。傾斜地で栽培された農作物については、「祖谷そば」、「でこまわし」、「ひらら焼」などの郷土料理として代々継承されてきました。第1次産業のなかでも林業就業人口については増加傾向にありますが、農業就業人口については大幅に減少しています。2015年における販売農家数は495戸、農業就業人口（自営農業に主に従事した人）は790人（高齢化率70%）であり、2005年と比較してほぼ半減しており、農業の後継者不足や担い手不足が数字に顕著に表れています。とりわけ、山間部で継承されている傾斜地農法については、一つあたりの畑の面積が狭く、耕運機などの機械の入りにくい急峻な地であるという特徴があるため、多くの生産量は望めず、また大きな労働力を確保することが難しい状況です。しかしながら、栽培された農作物に当地域の地形や自然を活用した付加価値を与え、ブランド化を図ることによって、他地域の農産品との差別化が可能となります。

【第二次産業】

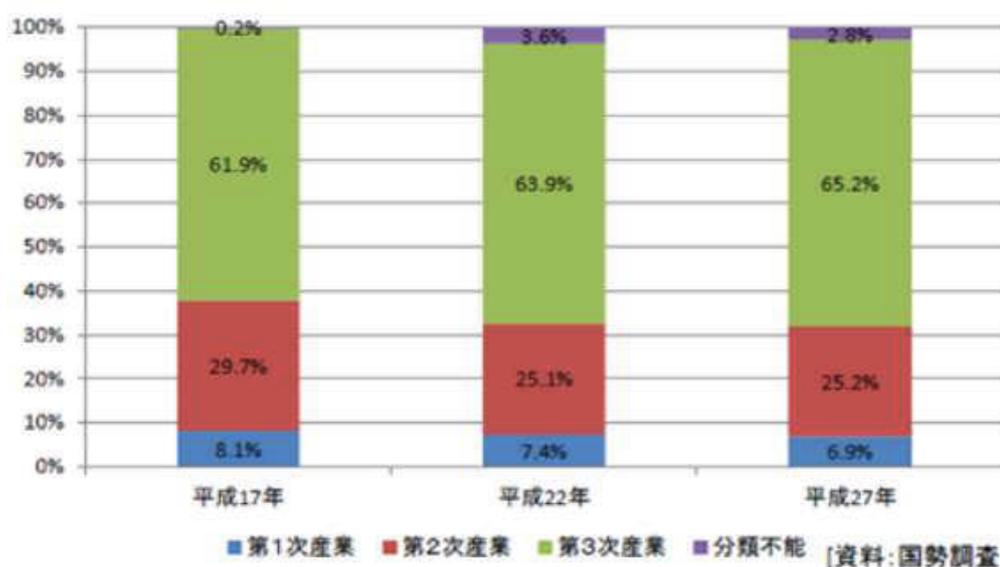
第二次産業の従業者数については、土木業を中心とした建設業、食料品製造業や製材業などの製造業が9割以上を占めています。建設業と製造業の割合はほぼ半々です。その理由として、当地域は斜面災害などが頻繁に発生する地域であり、集落をつなぐ道路や河川などの公共整備事業が頻繁に行われることが挙げられます。しかしながら、建設業就業人口は年々減少傾向を示しており、2009年から2014年の5年間で建設業従業者数が約1割減少しています。道路や河川などの公共事業が減衰されつつあり、今後当地域内、とりわけ傾斜地集落で暮らし続けていくことの大きな課題となっています。

【第三次産業】

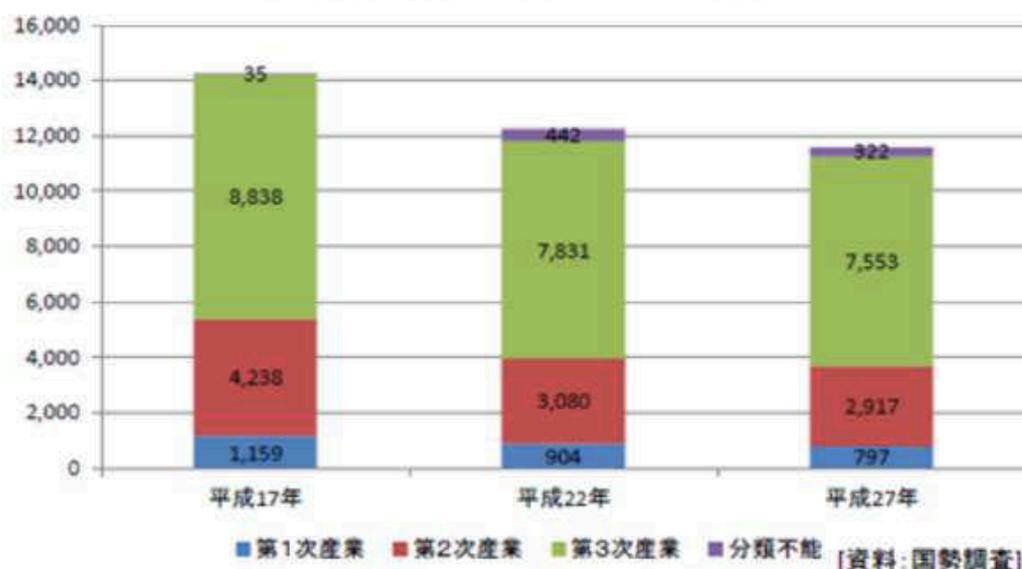
2014年の第三次産業の大分類従業者数は、卸売業・小売業が最も多く全体の28%程度、次に医療・福祉関係が26%、その次に宿泊業・飲食サービス業が12%となっています。2009年のデータと比較すると、医療福祉関係の従業者数が114%の伸びを示し、医療、福祉業の就業人口が年々増加しています。三番目に従業員数の多い宿泊業・飲食サービス業は、2012年と比較すると5%増となっています。

当地域は、県内でも有数の観光地である大歩危小歩危、急峻な地形が作り出す雲海（八合霧）、吉野川をはじめとする深い渓谷など特有の自然環境に恵まれています。また、大歩危小歩危と並ぶ観光地である祖谷のかずら橋をはじめ、傾斜地で栽培される特徴ある農作物、妖怪話やたぬき話をはじめとする口頭伝承など、自然環境と密接に関係した生活文化が色濃く遺っています。当地域での宿泊業・飲食サービス業は、これらの地域資源の恩恵をうまく活用しながら事業展開しています。

産業分類別就業者割合の推移



産業分類別就業人口の推移



◆地域資源の産業への活用について

当地域には、四国山地や讃岐山脈、そして吉野川水系に関わる多様な自然環境が存在しています。これらの特徴ある自然環境を保つべく、剣山系を源とする祖谷川の源流から吉野川中上流域までの広域にわたる「剣山国定公園」、香川県境一帯に広がる「箸蔵県立自然公園」などの自然公園があります。さらに地質鉱物関係の文化財として、国指定天然記念物および名勝「大歩危小歩危」、県指定天然記念物「太刀野の中央構造線」や「祖谷、三名の含礫片岩」などがあります。また、国指定天然記念物「三嶺・天狗塚のミヤマクマザサ及びコメツツジ群落」や県指定の「黒沢の湿原植物群落」など特色ある生態系、「祖谷の蔓橋」や「東祖谷山落合」、「西祖谷の神代踊」などの歴史文化遺産も文化財として国指定されています。また、自然公園や文化財等に指定されていない地域資源も多数あり、急峻な地形の上で伝承されてきた妖怪伝説、大歩危小歩危や祖谷に点在する鉱泉・温泉、池田町マチ・サラダや井川町辻の平野部で繁栄した刻みたばこ産業の遺構などがあります。最近では、吉野川の激流・静水面を活用したウォータースポーツなどが盛んです。加えて落合集落をはじめとする東祖谷地区の傾斜地集落では、古民家を活用した宿泊施設があります。さらには、傾斜地斜面で継承されてきた農法（傾斜地農法）は、2018年年3月に世界農業遺産に認定されています。

こうした多種多様の地域資源は主に第一次産業や第三次産業の中で活用され、当地域特有のツーリズムへと活かされてきました。とりわけ近年（2008年頃）から、大歩危小歩危、祖谷地区周辺のインバウンド観光誘客に向けた活動が推進されています。

◆近年の観光入込数について

当地域の近年の観光入込数は年間80万人前後※1であり、宿泊者数は2013年以降増加の傾向が続いています※2。観光客の最も多い観光スポットは祖谷のかずら橋であり、2019年度には約37万人が来訪し、2011年度より19%増加しています。祖谷のかずら橋の2019年度の渡橋者数は、2011年度と比べ、約2割増えています。観光客数の増加を支えているのが外国人観光客の急増です。2019年度の外国人のかずら橋の渡橋者数は2011年度と比較すると12倍を超えており、2019年度で見ると、渡橋者数全体の15%が外国人観光客となっています。これは、祖谷・大歩危地区が日本の山間部の原風景として、欧米諸国やアジア圏で

は中国、香港、台湾を中心とした旅行客に人気であることが影響しているためです。このように、特徴的な風景が作られた背景には、大地やそれと共存して育まれた人の営みが密接に関係しています。

<当地域のツーリズムの課題と今後について>

現在の当地域のツーリズムは、大歩危小歩危、祖谷地区などの急峻な地形の上で継承されてきた歴史文化を中心に展開され、これらは屈指の観光地名勝地として知られる存在となりました。それを可能にしたのは、①大歩危小歩危、祖谷地区という地域の土台を作り出した特有の地形や気象、②他地域にアクセスしづらい環境がもたらした特有の伝統文化の継承、③特有の自然環境や歴史文化のオリジナリティーに気づき、地域外に発信し続けてきた人々の活動の3つの要素です。しかしながら現在、人口減少やそれに付随する継承文化・産業の担い手不足に直面しており、長きにわたり培われてきた歴史文化も少しずつ失われつつあります。

もちろん大歩危小歩危、祖谷地区以外でも、地形に密接に関係した歴史文化が育まれてきました。しかしながら、その特徴を継承する人材の育成や継承していくための手法が十分ではなく、ツーリズムに関して当地域内での地区ごとに隔たりが生じ、「三好全体の特徴（＝三好らしさ）」を十分に打ち出せていません。

当地域らしい持続可能な地域社会を構築するためには、ツーリズムの推進（＝地域資源の持続可能な活用）は欠かすことができません。これまで受け継がれたこの地にしかない歴史文化や自然環境を、地域全体で活かし続けていく手法としてジオパークを活用することにより、大地をベースとした自然、先人が育んだ歴史文化、現代の人々の生活様式、そして自然と共存し続ける未来の地域社会をも包括し全てを見据えた「自然や歴史文化の恩恵に感謝しつつ、大地と共に生きぬいていく」ことに取り組んでいきたいと考えています。

※1) 2011年から2019年までの三好市役所産業観光部の市有観光施設入込客数データ

※2) にし阿波観光圏 徳島県観光動態調査